

<学力向上について>  
 ○学力検査全国平均点と比較するとあまり差はないが、  
 ・学力の育ちにばらつきがある。  
 ・思考力・判断力・表現力の育成が進んでいない。(特に算数、数学)  
 「表面的な解答が数多く見られ、無答も多い。読み解き、自分で考え、判断していくことをあきらめる生徒の姿が見られる。自己肯定感も低い。」という中学校の分析もある。

○学力向上への取り組みは学校ごとに行っている。  
 <成果の見られた実践例>  
 ・小学校算数  
 ただ答えを導き出すのではなく言葉で考え方を説明できる力を育成に取り組む。一人一人が一生懸命考えて書き表し、友達に説明。  
 ・中学校数学  
 数学の授業と家庭学習を連動して進める取り組み。授業に合わせ4問から5問程度の問題を作って宿題に。加配の先生も加わり全生徒の採点を行い、一人一人の子どもに返す。必要に応じて個別指導  
 ・中学校社会科  
 ICT機器を活用した取り組み。生徒一人一人が末端機器(タブレット)に自分の考えを入力。友達の考えたことを互いに合い、検討し合い、一人一人が自分の見方や考え方を深める。  
 ○英語教育について、小学校の取り組みは先進的であり speaking 能力の育成が期待される。ただ、これまでの取り組みでどのように中学生の speaking 能力が向上しているのかは明らかではない。

○学力検査の結果は学校ごとに違いはあるが、小諸市全体の児童生徒に共通する課題がある。小学校だけの取り組み、中学校だけの取り組みで解決できるものでもない。市内小中学校が課題を共有し、解決に向けて共に取り組むことが求められる

<児童生徒「一人一人」の育ちに目を向けた教育>  
 どの子どもにとっても保護者にとっても、学力が向上することは願いである。学力は児童生徒「一人一人」の問題である。また、少子化の中、どの子どももこれからの時代を支える大切な人材である。「一人一人」の育ちに目を向けた教育への転換を図る。

<学力向上を図る言語能力の育成>  
 高校入試改革や大学入学共通テスト実施においても、思考力・判断力・表現力の能力が育成されているかを重要視している。言語能力の育成が基礎となる。教師が教え理解させる学びと比べると時間も手間もかかるが学びの転換を図る。

<自信、意欲、自制心、自立心等の非認知能力の育成>  
 中学校で一人一人の生徒に行われた数学の実践をみると、継続した先生方の指導により、「自分もやればできる」という自信、「取り組んでみよう」とする意欲等の非認知能力が生徒に培われ、その結果生徒の学習が進み、学力が向上した。学力の向上には、こうした非認知能力の向上が不可欠。

<「育成」に力点をおく指導の転換>  
 これまではどちらかという「教えたことを理解したかどうか」という評価が中心になりがちであった。言語能力も非認知能力も「育成」が指導の中核となる。学びのプロセス、表現されたものから「少し変化したかどうか」を評価し、よさを認め、つまづきに応じた指導へ転換を図る

<人手と時間を確保し、効果的な取り組みを>  
 言語能力や非認知能力を「育成」することは多くの人手と時間を必要とする。一人一人の児童生徒に対応して「育つ」指導を実現するため、学校職員の配置を集中するだけでなく、保護者・地域・市民による学習ボランティア等の参加協力、行政サービス等も集中して、人手と時間を確保し、効果的な取り組みを進める

<ICT機器を活用と職員研修の充実>  
 児童生徒「一人一人」の学びを実現するため、ICT機器を活用した授業が効果を上げている。こうした学習を進めるための学校職員の研修とICT機器の充実を図る。

<横断的、連続的、系統的につなぐ一貫性あるカリキュラムづくり>  
 言語能力や非認知能力の育成は運動会や文化祭等の行事、特別活動、部活等も連動して進めて行く。また、発達段階に応じて系統性、連続性を大切にして9年間を見通して進める。その実現を図るカリキュラムづくりが必要となる。

<指導の成果を上げるマネジメントの実施>  
 カリキュラムや指導体制、支援体制が整っただけでは成果を上げることは難しい。

学校間、小学校中学校間の課題の共有と取り組みの連携・一貫の視点が大切

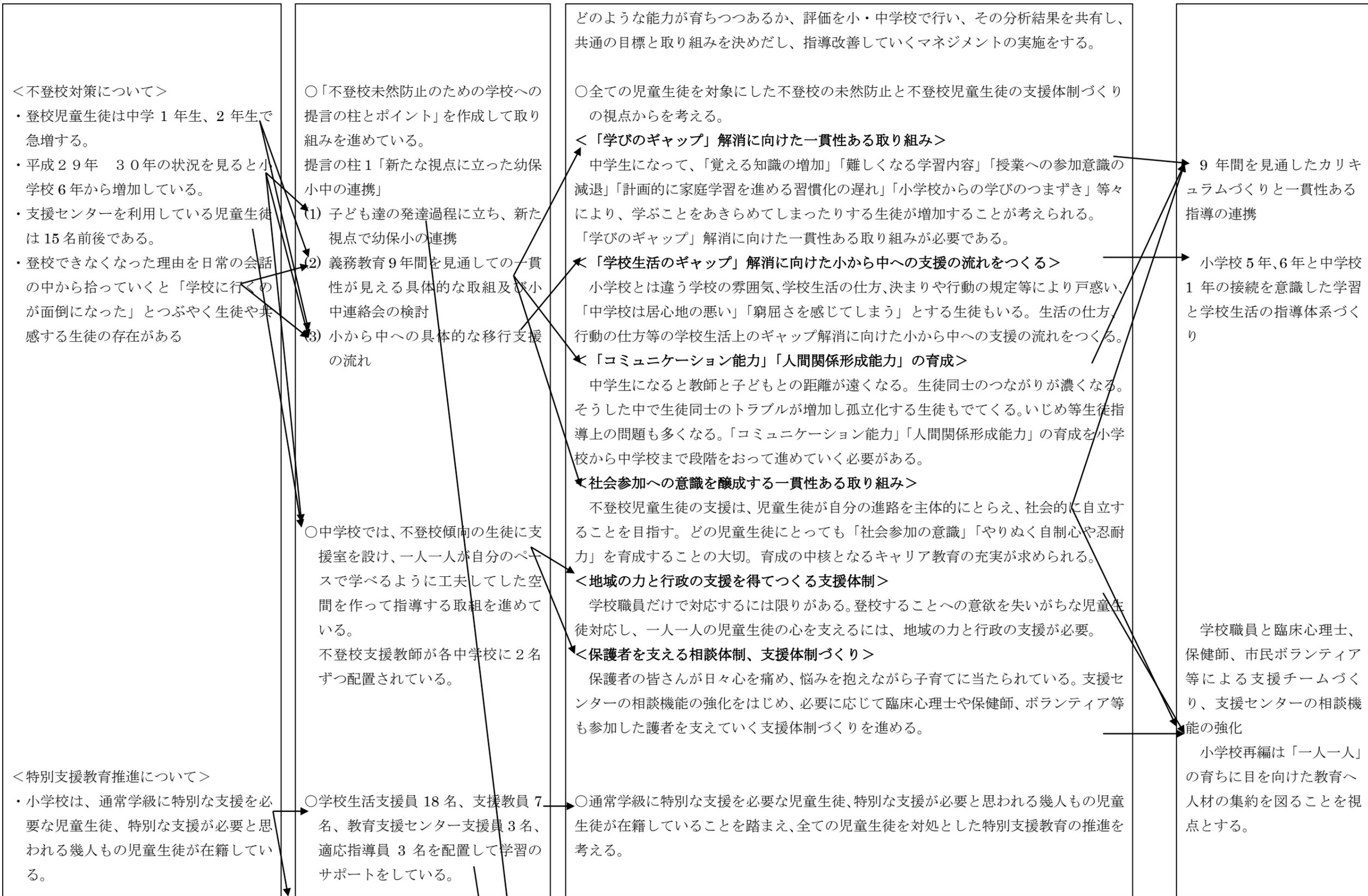
教育関係者のみならず市民の支援も得て取り組む。小学校再編は「一人一人」の育ちに目を向けた教育へ人材の集約を図ることを視点とする。

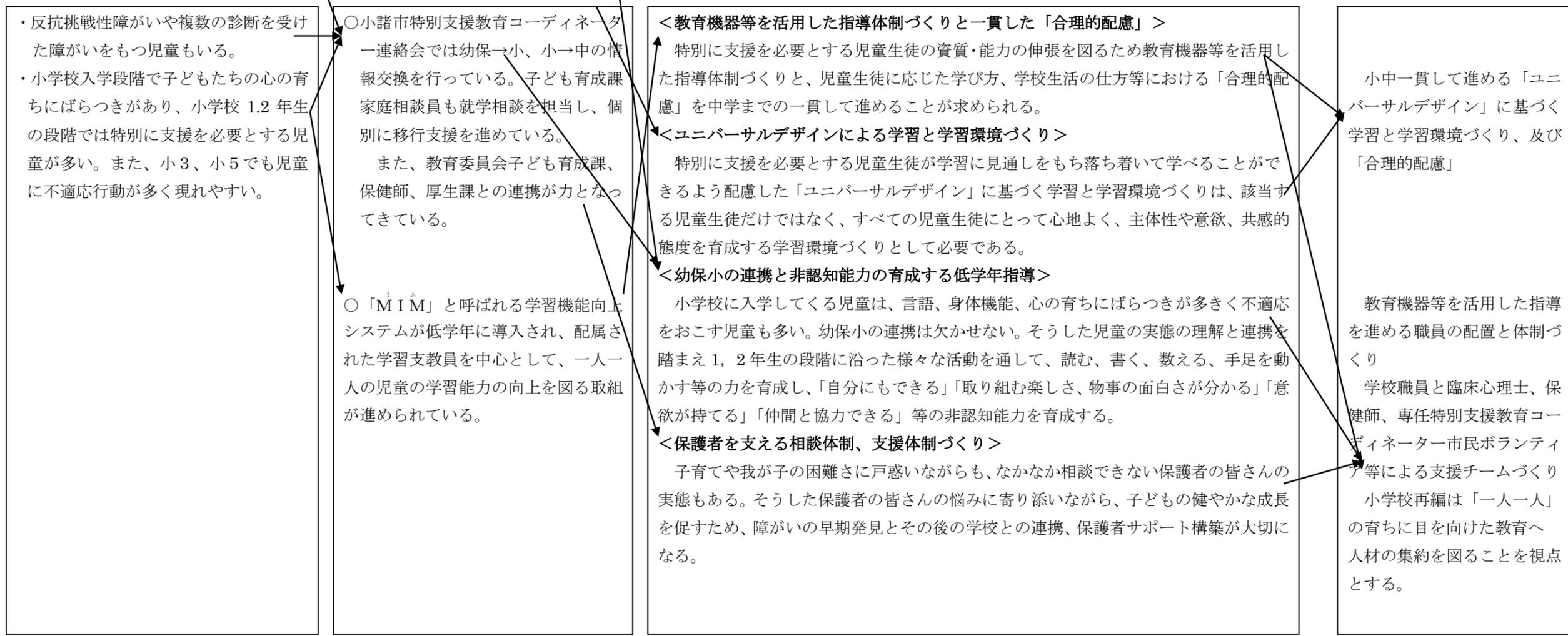
小学校・中学校が一貫して学びの転換を図り、言語能力の向上と非認知能力の向上を図る。また、「育成」に力点をおく指導の転換を図る。

小学校再編は、限られた教育予算を集中し、ICT機器をすべての児童生徒が活用できるよう整備する。

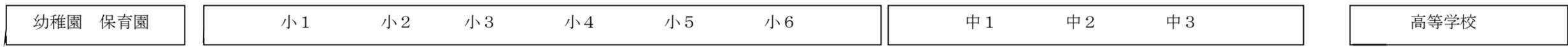
9年間を見通した一貫性あるカリキュラムづくりと一貫性ある指導の連携。

小中一貫性のあるマネジメントを実施する。





学校間、小学校中学校間の課題の共有と取り組みの連携・一貫 児童生徒「一人一人」の育ちに目を向けた教育への転換



接 続  
 「非認知能力」の育成、児童理解と段階に沿った活動、「読む、書く、数える、手足を動かす」等の力を育成

接 続  
 「学びのギャップ」解消、「学校生活のギャップ」解消に向けた学習と学校生活の指導体系づくり

進 学  
 夢や挑戦したい思いを醸成、良いところ、得意とするところを知り、自分らしく学べる高校を選択できる能力を育成

- 一 貫
- 「思考力・判断力・表現力育成」の育成
  - 「コミュニケーション能力」「人間関係形成能力」の育成
  - 「言語能力」「非認知能力」の育成
  - 「社会参加への意識」の醸成
  - 横断的、連続的、系統的につなぐ一貫性あるカリキュラムづくり
  - 小中一貫性のあるマネジメントの実施
  - 教育機器等を活用した指導体制づくりと一貫した「合理的配慮」
  - ユニバーサルデザインによる学習と学習環境づくり

- 教職員、地域の力、行政の力の集約
- 保護者を支える相談体制、支援体制づくり
- ICT機器の活用と職員研修の充実